

# 講義 源氏と源氏以後

—— 第四講 平安後期物語の可能性 ——

## 第一講・「文学」と「効用」の問題

口上

- 一 孝標女における「影響」のかたち
  - 二 「文学」における「効用」の問題
  - 三 『源氏物語』の「効用」 (以上、本誌第82号)
- 第二講・紫式部と孝標女の距離
- 一 平安中期女性作家関係系図
  - 二 関係系図を読む
  - 三 「中の君」の物語 (以上、本誌第84号)
- 第三講・藤原定家という存在
- 一 『源氏物語』の場合
  - 二 『狭衣物語』の場合
  - 三 その他、平安時代成立の作品の場合
  - 四 「藤原定家」という存在 (以上、本誌第87号)

横 井 孝

## 一 「第四講」の位置づけ

本稿は連載の第四回目なので表題のごとくになるが、実際の「講義」の展開としては、

第四講・『無名草子』と『狭衣物語』

第五講・『狭衣物語』の句型

第六講・寝覚学入門

第七講・『夜の寝覚』と『源氏物語』

第八講・『夜の寝覚』の欠けた環

とありたいところであった。そう続かなければ、論の展開がなめらかではないはずだ、と稿者自身が認識している。少なくとも、本稿のもととなったかつての講座はそのように展開した。しかし、右の「第四講」については、稿者は、

▽鈴木弘道『無名草子論——「女性論」を中心として——』

(大学堂書店、一九八一年一月刊)

▽久下裕利『狭衣物語の人物と方法』(新典社、一九九三年一月刊)

▽後藤康文『もうひとりの薫——『狭衣物語』試論』(『語文研究』六八号、一九八九年二月) ↓王朝物語研究会編『研究講座狭衣物語の視界』新典社、一九九八年四月刊、所収)

▽堀口悟『狭衣即位の意義——『狭衣物語』の主人公の天皇即位を考える——』(王朝物語研究会編『論叢狭衣物語2——歴史との往還——』新典社、二〇〇一年四月刊)

などの諸論(右は『狭衣』研究における基本文献の一部というべきであろう)に依存していて、特に異見 different opinion や独自性 originality を持たないため、( ) であらためて発表する材料がない。

また、右の「第五講」から「第八講」の内容については、すでに関連する論考をおおやけにしまっている。すなわち、

①『寢覚』論——「女の物語」として・序説」(『女の物語』のながれ——古代後期小説史論』加藤中道館、一九八四年一〇月刊、所収)

②「母性論としての『寢覚物語』」(王朝物語研究会編『論集 源氏物語とその前後1』新典社、一九九〇年五月刊、所収)

③『寢覚』の風貌——「源氏以後」の世界へ——(秋山虔編『平安文学史論考——武蔵野書院創立90周年記念論集』武蔵野書院、二〇〇九年一月刊、所収)

④「物語・終焉のかたち——『狭衣物語』結尾の位相——」(実践女子大学文芸資料研究所編『物語史研究の方法と展望(論文篇)』、一九九九年三月刊、所収)

⑤「物語から日記へ、日記から物語へ」(王朝物語研究会編『研究講座 王朝女流日記の視界』新典社、一九九九年六月刊、所収)

⑥『寢覚』(夜の寢覚)結尾の風景」(『国文学解釈と鑑賞』第七五卷三号、二〇一〇年三月)

⑦「夜の寢覚」末尾欠巻部断簡の出現——伝後光厳院筆物語切の正体——(横井孝・久下裕利編『考えるシリーズⅡ 知の挑発①王朝文学の古筆切を考える——寢覚と浜松を考える——』武蔵野書院、二〇一四年五月刊、所収)

などがそれで、それらは「講義」と一部もしくはほとんどが同一の内容なのである。重複するものを公表するわけにもゆかない。したがって、ここでは既成稿に譲って、右の

(本来あるべき——あつたはずの)「第四講」〜「第八講」を割愛することにした。

右に初出であげたもののうち、②は旧著『円環としての源氏物語』(新典社、一九九九年五月刊)に、③④⑥は『源氏物語の風景』(武蔵野書院、二〇一三年五月刊)にそれぞれおさめたので、そちらの方での参照を是非ともお願いしたい。<sup>(1)</sup>

## 二 平安後期物語と古代説話の型①

——鈴木一雄論をめぐって——

平安後期物語を論じようとする際、かならず俎上に載せられるのが『源氏物語』受容の問題である。正面から論じられることはなくとも、つねにそれを直接あるいは間接に意識した議論になるはずである。

それも道理以前の問題で、作品自体がそのような観点を要請している、ともいえるのであろう。『狭衣物語』冒頭部には、すでに、

……中島の藤は、松にとのみも思はずさきかゝりて、  
山ほとゝぎす待ちがほなるに、池の汀の八重山吹は、  
井手のわりにやと見えたり。光源氏の、身も投げつ  
べき、との給けんもかくや、と、独り見たまふもあか

ねば……

(岩波旧大系本、二九頁)

という明記があり、また、それにづく人物紹介の定型部分にも、「堀川の大殿と聞えさせて、関白し給ふは、一条の院・当帝たうていなどの、一つ后腹の二の御子」「何の罪にか、たゞ人になり給ひにければ、故院の御遺言のまゝに、帝、たゞこの人の御心に世を任せ聞えさせて」「二条堀川のわたりを四町築よまちつきこめて、心々に隔てつゝ、造り磨かせ給へる玉の台うへなに、北の方三人を住ませたてまつる」(三九頁)など、容易に『源氏物語』を連想させるような記述、あるいは『源氏物語』とは不即不離の距離感ともいふべき叙述が設けられている。

『夜の寝覚』冒頭もまた、

……そのころ太政大臣ときこゆるは、朱雀院の御はらからの源氏に成給へりしになむありける。こと笛の道にも、ふみのかたなだにも、すぐれて、いとかしこくものし給ひけれど、女御ばらにて、はかなくしき御うしろみもなかりければ、中くたゞ人にて、おほやけの御うしろみとおほしおきてけるなるべし。

(尊経閣文庫本による)

というぐあいに『源氏物語』の設定を敷衍するように書かれているというのは周知のことである。

ことほどさように、平安後期物語は、表現なり構造なり

『源氏物語』を「本説」として引くことが「源氏以後」に座標を得る方法となつてゆく。——ちなみに、和歌技法における「本歌取り」に倣つて、このような方法を「物語取り」とか「源氏取り」と称する論もある。しかし、平安時代物語の研究者コミュニティ community におけるスラング slang のようなものであつて、熟さぬ用語といふべきである。古くより「本説」といふ歴史的伝統的な適語がある。むしろ、これを用いるべきだ——とは、野村精一より面識をえた四半世紀も前に教えを受けている。以来、稿者はこの語を用いることとしている。

その「本説」としての『源氏物語』が平安後期物語にとつてどのような位相をもっているのか。それについては、鈴木一雄に明解な論があつた。

……物語はもともと、多くの先行文学を取り込むところに成立する。この点もすでに述べたとおりである。後期物語における『源氏物語』取り込みもまた、物語に許された作法であつたはずである。しかしながら、これを物語の流れから見れば、やはり『源氏物語』以前とは際立つた相異を見せている。前期物語にあつては、天人女房譚とか、貴種流離譚とか、継子虐め譚といった古伝承「話型」の枠組みがまずあつて、その内側にあつて物語の取り込みがなされている。先行物語

の取り込みといつても、けつして伝承「話型」の枠は崩れてはいないのである。ところが、後期物語においては、伝承「話型」の枠がはずされ、その代わりに『源氏物語』の取り込みが、ほとんど第二の基層部ともいふべき位置を占めている。前期物語から見れば関係位置の逆転といえよう。その意味では、物語文学にとつてたしかに大きい転換なのである。

後期物語の伝承性は、ほとんど基層とは言えない。それは、物語内部における必然性を失いながら断片的に残存するに過ぎない。古伝承的基層の断片化に代わつて、大きい拠り所になつたのが『源氏物語』という目前に輝く先行の物語であつた。『源氏物語』は以後の物語にとつて、まさに第二の基層部となつたのである。おおまかにいえば、これこそ『源氏物語』の影響といわれるものの意味であらう。

(傍線——引用者私意)

長めの引用になつたが、論旨を明確にするための作業なので諒りょうとせられたい。

鈴木のいうところは明瞭である。平安後期物語においては、「伝承性」は「基層」たりえなくなつていくというのである。さらに直後の後文に、『無名草子』の『狭衣』浜松『とりかへばや』等々の物語評に「さらでもありぬべ

き事ども」「その事なからましかはと覚ゆるふしぶし」「まことしからぬ事ども」と批判されている内容を継承し、平安後期物語の傾向性として「現実から遊離した超自然、非現実的要素」が目立ち、それは「古伝承の基層」つまり古代説話の型が「断片」化した結果として、物語内部での必然性を失ったためである、と説く。「源氏以前」において「基層」であった部分が形骸化し、「源氏以後」はそっくり『源氏物語』が基層として象嵌された、というのであり、ほとんど図式的ではあるが、右に概観したような作品状況のもとで、理解しやすい言述だったのである。と同時に、研究者たちにも受け入れやすいものだったのであろう。これに対する際だった反論や批判は、これまでにはほなかったように見受けられる。鈴木一雄本人にとつても、自信のある見解だったのであろう。その後、折にふれては同様の主張をくり返し展開している<sup>3)</sup>。

一方で鈴木は、右のような平安後期物語に対して、それが受容した、当の『源氏物語』の方は、「古伝承的基層」つまり古代説話の型が失われるどころか、むしろ「物語内部の必然性によって、伝承性は自家の虚構世界にみごとに吸収されていた」のであり、「伝承性」が非現実的な要素として目立ってしまう後期の物語群とは際違った差異を示している、と評価する。

後期物語文学における必然性を持たぬ、浮きあがった超自然超現実的現象の点綴は、一方で、伝承性がそれほどまでに物語文学にとって固有のものであり、本来あるべきものとしてついに消滅することがない事実を証明するとともに、もう一方で、物語内部の必然性によって取り込むのでない限り、伝承性は現実性の基調と相容れず、物語全体から見るとき、不協和音を生じるところまで来てしまっていることをものがたる。

鈴木がここでいうように、「伝承性」が「物語文学にとって固有のもの」である以上、『源氏物語』もまた古代物語の一員として、古代説話の型を踏襲するのは「必然」であるはずだ。もちろん、それに関する研究史は積みかさねられており、たとえば阿部秋生『源氏物語研究序説』後篇のほとんどを費やした貴種流離譚の構造分析のごときスケールの大きい論があり、それをはじめとして、あまたの先例をあげることができるだろう。

なかでも、稿者の印象に深いのが、以下にあげる中西進の論<sup>4)</sup>である。中西は、王権争奪に巻きこまれて辺境の地に落命した悲劇の主人公たち——倭建命・輕太子・有間皇子・大津皇子といった人びとが、いずれも卜占（予言）に関わりをもち、かつ美貌の持ち主という共通点のあることを指摘する。古代では「醜」と同様に、異様な美は異常

な力を有すると考えられていた。「美なるものが流離を余儀なくされるという構造が古代説話にある」というわけである。そして、美なるものは、延長線上に『伊勢物語』の主人公があり、『源氏物語』の光源氏があるということになる。

そしてかく美貌者の運命が明らかになれば、『源氏物語』の作り手は、この話型から自由ではありえない。主人公を「光る君」というのも高麗の者がつけたのだという。その高麗の人相見は光源氏の人相を判じて「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おほします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。おほやけのかためとなりて、天の下を補弼くる方にて見れば、その相違ふべし」といったとする。渡来僧が占うというのまで大津とひとしいが、その骨相こつそうを王者たるか否かにかけて述べるのである。源氏は……いりくんだものになつてゆくが、私の関心は、こんなに巧みに造型されながら、源氏の骨格をなす話型において作者が古代説話から解放されていなかったことにある。私はこれを、むしろ利用したなどというものではないと考える。話の一つの必然として、この型が要求されていたにちがいない。

(傍線——引用者私意)

ここで中西の強調する点——「話型から自由ではありえない」「古代説話から解放されていなかった」「利用したなどというものではない」「話の一つの必然」と畳みかけているところを、稿者も強調しておきたい。物語が物語であるために、作者が物語作者たろうとした時に「必然」的に「自由ではありえ」なくなる、という事実を凝視すべきだ、ということなのである。中西の文中、鈴木一雄の論にもあった「必然」が、(おそらく、この件に関しては)交渉のなかつたであろう相互に、共通して用いられていることは偶然ではない。物語という構造体は、いい換えれば「話型」そのものと指摘しうるものであり、「話型」は趣向として選ばれるものではないからこそ「必然」なのである。

しかし、この「必然」は「源氏以前」に限定されることなのだろうか。鈴木も、「源氏以後」においても「必然性を失いながら」とはいいながらも「断片的に残存する」といわざるをえない。右にふれたごとく、物語という構造体は「伝承性」≡古代説話の型と、いわばほぼ同体だからである。ただし、鈴木のように、「断片」化した「伝承性」と『源氏物語』の基層だけで物語は存立しうるものなのだろうか。

### 三 平安後期物語と古代説話の型②

——久下裕利・稻賀敬二論をめぐって——

久下裕利は、平安後期物語とはいえ、そこにある物語的な趣向はすでに『源氏物語』後篇（久下は「第三部」という）に萌芽があるといい、「境界」など存しない、という立場をとっており、さらに次のようにいう。

しかし、『源氏物語』享受の実状が、次世代の物語作者によって濃密な関係として均一に創作へと転換される時、まずもって一線を画する徴候となるのであって、現存の『夜の寢覚』『狭衣物語』『浜松中納言物語』を比較してみる限りでも、それは首肯できるのである。

これら三つの中長篇物語が『源氏物語』との一体化現象を強烈に内包していることで、近代の物語文学史観が、それと峻別するために蔑ろにした視点とは異なって、〈後期〉という呼称での認定が旺盛な物語産出の起点を得ていた時期という意味で理解されなければならぬだろう。

つまり、ここに示された三作品に代表されるような後期物語が『源氏物語』との一体化現象——鈴木一雄のいう『源氏物語』（が）……第二の基層部」となったと見なされること——によって、「後期」が蔑称の語と評価され

ている現状をあげる。そして久下は、むしろ「後期」と呼ばれる時期こそが、それ以前にもまして「旺盛な物語産出」をほこる時代であったことを評価すべきだといひ、鈴木に代表されるような、後期物語の貶価を逆転してみせたのである。近年、久下裕利編『狭衣物語の新研究——頼通の時代を考える』（新典社、二〇〇三年七月刊）、和田律子『藤原頼通の文化世界と更級日記』（新典社、二〇〇八年二月刊）など「頼通の時代」を標榜する論著が輩出するゆえんであろう。

平安後期物語の評価は、古く藤岡作太郎の、

たゞ、因循固陋、毫も根本的革新を企つべき意気なし。

……この時代の小説として評論すべきもの殆ど存せず。<sup>(6)</sup>

とあったごとき印象批評に、いまだに縛られているのではないかと付度される。特に、ことさら『源氏物語』と後期物語を比較し、前者を「『源氏物語』が獲得した真の意味での現実性」と高らかに歌いあげるかたわら、後者を「現実から遊離した超自然、非現実的要素」（鈴木著）とことさらに貶称するのは、『源氏』に足場をおく研究者による、「我が仏尊し」の心情吐露にほかなるまい。

久下は、平安後期物語再評価の先陣をつとめる一人として、『源氏』の影響という一言ですませてしまいがちな問題を、再点検してきた。たとえば、いわゆる「源氏取り」

という創作態度が、岩波旧大系本（内閣文庫本）と朝日古典全書本（元和九年版古活字本）の間で様相を異にすることを挙げ、『源氏物語』の世界にそのまま似せていくのではなく、変型していく……享受者にイメージの先行を与えておいて、それを逆転する方法<sup>7)</sup>があることを『狭衣物語』冒頭「光源氏の、身も投げつべき、との給けんもかくや」などの実例に沿って指摘している。

また、別の論稿では、『源氏』『狭衣』『浜松』における「ゆかり」「形代」「転生」、宇治十帖・寝覚『浜松』の姉妹譚・尼姿、『とりかへばや』『堤中納言』などの変装など、後期物語のおもなモチーフを、

- (1) ゆかり・形代
- (2) 姉妹・尼姿
- (3) 変装・変身

と分類したうえで、

『源氏物語』を頂点とするそれ以後の物語文学史の中で、(1)では『源氏物語』の達成からの変形、(2)では『源氏物語』の未開拓への創造、という意義を荷ったモチーフであったと考えている。モチーフは物語を構成していく主動的な方法素材であって、テーマ形成の中核となる。男の物語と言ったり、女の物語と言ったりするだけでは漠然とした把握に過ぎなく、個々の作品にか

えしてテーマを探っていくべきであって……<sup>(8)</sup>

と論じている。この分類には、あきらかに久下が私淑する稲賀敬二<sup>(9)</sup>の論にある「輪廻・変形・晩年執筆型などの視点」「隠身」等々の影響を見てとることができようが、一方、文末あたりの「男の物語と言ったり、女の物語と言ったりする……」というのは、拙著『女の物語』のながれ——古代後期小説史論（加藤中道館、一九八四年一〇月刊）などに対する揶揄であるらしい。ただし、それに対するコメント comment はいまは措くとして、(1) (3)に分類されたモチーフ群が、『源氏物語』を含む「源氏以前」のその単なる模倣ではなく、「変形」「創造」を担った拡大再生産なのだ、と指摘する点については、稲賀敬二の衣鉢を継いで、藤岡作太郎以来の評価——これは商業世界における、一種の貶価 negative ad campaign に似ているといえるのではないか——に対抗するとらえかたといえるべきであろう。

稲賀敬二には「後期物語は『源氏物語』の亜流か」というストレートな問いかけを題目とする論がある。サブ・タイトルにあるように「寝覚の広沢の准后」と「源氏の准太上天皇」を対比し、

男女両主人公の間柄は長く世間には公表されぬ秘密の關係だったし、それだけに石山の姫君の母が誰であ



るかは、一部の人にしか知られていなかった。また、東宮の外祖母といつても、直接の血のつながりはない継母子の關係である。かつ、准後の資格を満たす条件は巻五ではじめて揃えられる。そういう細い糸をつなぎあわせ、皇女でもなく天皇の配偶者でもない女主人公に准後の地位を極めさせ、読者も納得する構想を展開させるのは、『源氏物語』の模倣というレベルでは不可能である。『源氏物語』の亜流というのは当たらない。<sup>(11)</sup>

と実例を通した指摘がある。いちいち、このような、亜流か否かなどと問わねばならぬというのは、二〇一六年の現在、今さらながらの感がなくもない結論のようではあるが、長らく平安後期物語を貶価させてきた視点は、藤岡作太郎を持ち出すまでもなく、強固なものだったし、現在ですら「我が仏尊し」の『源氏物語』研究者たちには、払拭しきれていないかも知れない觀念なのである。——「源氏以後」というくくり方自体が、そうした觀念を包含するものではないのだが。

#### 四 平安後期物語における古代説話の型

『狭衣物語』冒頭部、定型であるところの主人公の身辺

紹介記事は、よく知られるところながら、このようなものであった。

かゝる御中にも、齋宮をば親さまにあづかり聞こえ給ひにしかば、やんごとなくかたじけなき方には、心ばへよりはじめてすぐれ給へるにしも、かく世に有難き此世のものとも見え給はぬおとこ君さへ、たゞ一人ものし給へるを、いかでかは、世の常に思ひ聞えさせ給はん。……母宮などは、「天人などの、はじめて天降り給ひたるにや」と、いと恐ろしく……

(岩波旧大系本、三三三頁)

狭衣の出生の場面、「かく世に有難き此世のものとも見え給はぬおとこ君さへ、たゞ一人ものし給へる」とは、後半に注目すれば、光源氏誕生の場面、

さきの世にも御ちぎりやふか、りけん、世になくきよらなるたまのをのこみこさへうまれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給て、いそぎまいらせて御覽するに、めづらかなるちこの御かたちなり。 (桐壺、六頁)<sup>(12)</sup>

の影のもとにあることは容易に見てとることができる。物語の主人公の出生であるにもかかわらず、添え物の「さへ」が用いられるのは特異なかたちであることに注目し、『源氏物語』冒頭記事は光源氏の登場が第一目的のではなく、まず両親の悲恋の物語が先行し、それを受け継ぐものとし

ての男児出生が描かれるところに「さへ」が用いられるのだ——とは益田勝実が喝破したところである。だからこそ、当該『狭衣』の『源氏』引用が明瞭な箇所なのである。

ただ、一方、その前半「かく世に有難き、此世のものとも見え給はぬおとこ君」という仰々しい表現は、光源氏には似つかわしくないのではないか。右には明融本で示したが、諸本異同なく、『源氏』本来の表現というに近い本文であろう。光源氏には、ついぞこの類のあからさまな表現は使われなかったとおぼしい。右に見たように、光源氏誕生では「世になくきよらなるたまのをのこみこ」「めづらかなるちこの御かたち」で十分に主人公の資格があたえられたのである。

『うつほ物語』の場合、俊蔭の巻冒頭の俊蔭登場場面、

むかし、式部大輔・左大弁かけて、清原の大君、御子ばらにをのこ子一人もたり。その子、心のさときことかぎりなし。ち、は、いとあやしき子なり。おひいでむやうをみむ」とて、ふみもよませず、いひをしふることもなくておほしたつるに、年にもあはず、たけたかく、心かしこし。

(明治・校注古典叢書、(1)七頁)

また、同巻の仲忠誕生の場面、

かくて六月六日、この子むまるべくなりぬ。けしきば

みてなやめば、おんな、きもころをまどはして、「たひらかに」と申しまどふほどに、ことになやむこともなくて、たまひかりかやくをのこをうみつ。

(1)四四頁)

などの本文を見ても、『源氏物語』桐壺の巻の表現が格別簡略に過ぎるというわけではなかったと思える。ところが、同じ『源氏物語』のなかでも、顕在化するのは光源氏の生涯をおえたあとの後篇に入つて、匂宮の巻冒頭部の人物紹介の一節、薰について次のような本文がある。

この君は、まだしきに世のおほえいとすぎて、思ひあがりたることよなくなどぞものしたまふ。げに、さるべくて、いとこのよ(世)の人とはつくりいでざりける、かりにやどれるかとも見ゆることそひ給へり。かほかたちも、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あなきよらと見ゆるところもなきが、ただいとなまめかしうはづかしげに、心のおくおほかりげなるけはひの、人々にぬなりけり。か(香)のかうばしさぞ、この世のにほひならず、あやしきまで、うちふるまひ給へるあたり、とをくへだぐる程のおひ風も、まことに百ぶのほかもかほりぬべき心ちしける。(一四三三五頁) いま仮に傍線をほどこした箇所は、直前に「むかし、光君と聞こえしは……」とあり、光源氏との対比で生じた一

節なのである。源氏には用いられなかった、やや大仰——印象批評ではあるが——とも思える表現がすでにここに出現しているのである。前節でふれたように、久下裕利が、平安後期物語にある趣向はすでに『源氏』のいわゆる第三部に萌芽すると指摘した、そのゆえんでもあるうか。

いずれにせよ、「源氏以後」は決して特別なものでなく、「源氏以前」の物語構造や『源氏物語』にも包含される古代説話の型が「断片化」してなどいないことは、もはやあきらかなのである。

ところで、平安後期物語が『源氏物語』はもとより、「本説」として先行の物語を吸収していることは、すでに手垢のついた問題ではある。わかりやすい例として『夜の寢覚』の冒頭部がある。その概略は次のとおり。

——朱雀院の弟である源氏の太政大臣には、大君と中の君という二人の姉妹がいた。姉妹の母は早くに亡くなり、父大臣が姉には琵琶、妹には箏を教えるなどして、大事に育てていたが、中君が十三歳の八月十五夜、彼女の夢に天人が降り来たつて、琵琶の奏法を伝授する。さらに翌年の八月、再び夢に天人が現れ、琵琶の秘曲を教えるとともに「あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」という言葉を残して去っていった。——

つたない要約ではあるが、「朱雀院の弟である源氏の太政大臣」「大君と中の君という二人の姉妹」などの設定が、『源氏物語』への連想をうながすことは先にもふれたとおりで、特に波線をほどこしたところが、橋姫の巻と重なりあうこともまた、よく知られるところである。

A はるのうら、かなる日かげに、池の水とりどものは、  
ねうちかはしつゝ、をのがじ、さえづるこゑなどを、  
つねは、かなきことにみたまひしかども、つがひ（番）  
はなれぬをうらやましくながめたまひて、君たちに御  
こと（琴）をもをしへきこえ給……ひめぎみにひは（琵琶）、  
わかぎみにさう（箏）の御こと。まだおさなけれど、  
つねにあはせつゝ、ならひたまへば、き、にく、もあらで、  
いとおかしきこゆ。

（二五二〇～二五二二頁）

ところが、薫が宇治の八の宮邸を訪れる、これまた有名な垣間見の場面に出てくる姉妹のすがたは、

B あなたにかよふべかめるすがた（透垣）のと（戸）を、  
すこしをしあけて見たまへば、月おかしきほどにきりわたれるをながめて、すだれをみじかくまきあげて、  
ひとくゝるたり。……①内なる人一人はしらすこしるかかれて、  
びはをまへにきて、ばちをてまざぐりにしつゝ、  
ゐたるに、くもがくれたりつる月の、に

はかにいとあかくさしいでたれば、「あふぎならで、これしても月はまねきつべかりけり」とてさしのぞきたるかほ、いみじくらうたげに、ほひやかなるべし。②そひふしたる人は、ことのうへにかたぶきさか、りて、「いる日をかへすばちこそありけれ。さまことにもおもひをよび給御心かな」とて、うちわらひたるけはひ、いますこしおもりかによしづきたり。「をよばずとも、これも月にはなる、物かは」など、はかなき事をうちとけのたまひかはしたるけはひども、さらによそに思ひやりしにはにず……

(橋姫、一五二二—一五二三頁)

とあり、三条西家流の古注釈類(『弄花抄』『細流抄』『眠江入楚』)などは、①「内なる人」を大君、②「そひふしたる人」を中の君とし、ひとり古注からは『孟津抄』のみと現行諸注釈とが①中の君、②大君とする。古注はAの場面との整合性をもとめたものであるが、ここに交わされる会話と態度・所作から類推するかぎり、『孟津抄』および現行注の示す人物比定が穩当とされているようなのだ。Aの場面に対応させるならば、Bの場面は古注釈流の解釈にならなければいけない。しかし、物語の展開からすれば、Aの「大君(ひめぎみ) 琵琶／中の君(わかぎみ) 箏」に反して、Bの場面は「中の君(内なる人) 琵琶

／大君(そひふしたる人) 大君」と充てたいところなのである。A・B両者の関係は、矛盾 contradiction であり、またパラドックス paradox なのである。

こうした楽器の入れ替わりによる矛盾とおぼしき事態は、『源氏物語』本文の伝来過程に問題があったか、作者になんらかの錯誤があったかと思えるが、現存諸本の本文には異同が認められないところから、本来のところで由来するのもかも知れない。ただし一方で、それほど騒ぎたてることがないかも知れない、とも思えるのだ。つまり、片桐洋一のいうところの「説話・伝承の語りかえ」である。

『夜の寢覚』の作者は、この「語りかえ」を理解したかどうかはわからない。けれども、『寢覚』作者は、『うつほ物語』にあるような「天人による秘曲伝授」を組み込むことによって、楽器の入れ替わりの矛盾、パラドックスを乗り越えようとした、あるいは乗り越えたのである。この操作は、単に『源氏物語』を基層部として組み入れたということではなからう。

天人が降臨して主人公に秘曲や秘技を伝授するという類型は、物語の先蹤として『うつほ物語』俊蔭から吹上の上巻にいたる音楽譚として血肉化しているし、『今昔物語集』『十訓抄』等々類例には事欠かない。『源氏物語』橋姫の一場面などを本説としつつも、「あたらの人の、いたくも

のを思ひ、心を乱したまふべき宿世」という（予見という  
かたちでの）予言譚と音楽説話の型を組み合わせる技法は、  
平安後期物語のいわば「お手柄」ではなかったのか。

このような『源氏物語』享受の方法もあるのであって、  
平安後期物語はその方法の開拓をめぐる可能性を模索し  
ていたのではなかったか。<sup>15)</sup>

## 注

(1) なお、第一講・第二講の内容についても、論文ではないが、  
講演記録「源氏物語がもたらした縁——紫式部と孝標女  
をつなぐもの——」（実践国文科会『りんどう』第四〇号、  
二〇一五年七月）でも敷衍し、紹介した。

(2) 鈴木一雄『堤中納言物語序説』（桜楓社、一九八〇年九  
月刊）、以下の引用・言及は同書六〇～六五頁による。

(3) 管見のおよぶ範囲でも、「更級日記」と後期物語」（學  
燈社『国文学』一九八二年一月、のち『王朝女流日記論考』  
至文堂、一九九三年一〇月刊、所収）、「『源氏物語』の  
愛読者」二二六～二二七頁、「物語文学の展開」（『物語  
文学を歩く』有精堂、一九八九年三月刊、所収）三八頁、  
などがある。

(4) 中西進「辺境の死——古代王権をめぐる悲劇の構造」  
（『文学』一九八三年一月、のち『中西進著作集12

日本文学の死／辞世のことは／日本語の力』（四季社、  
二〇〇九年一月刊）所収。引用は著書一〇～一三頁に  
よる。

(5) 久下裕利「平安後期物語と『源氏物語』」（『物語の廻廊  
——『源氏物語』からの挑発』新典社、二〇〇〇年一〇  
月刊、所収）、一七七～一七八頁。

(6) 藤岡作太郎『国文学全史 平安朝篇』（東京開成館、  
一九〇五年一〇月刊）、六一一頁。ただし、ここでは実践  
女子大学図書館蔵、「山岸文庫」印のある、一九〇六年  
三月刊の再版による。

(7) 久下晴康（裕利）「『狭衣物語』の形成——「源氏取り」  
の方法から——」（『平安後期物語の研究狭衣浜松』新典  
社、一九八四年二月刊、所収）。

(8) 久下裕利「平安後期・末期物語の方法」（『狭衣物語の人  
物と方法』新典社、一九九三年一月刊）二二二～二二三頁。

(9) 稲賀敬二「後期物語の精神と支盤——輪廻・変形・晩年  
執筆型などの視点——」（學燈社『国文学』一九八一年九  
月、のち『源氏物語の研究——物語流通機構論——』笠間書院、  
一九九三年七月刊、所収）、「隠身」と「変形」序説」（『平  
安後期——物語と歴史物語』笠間書院、一九八二年二月  
刊、所収。のち稲賀敬二コレクション1『物語流通機構  
論の構想』笠間書院、二〇〇七年五月刊、所収）など。

- (10) 稲賀は、前掲注9論「隐身」と「変形・序説」において、紫式部を代表とする一条朝文芸が《隐身》《変形》のモチーフの扱いに冷淡で、むしろ平安後期において拡大再生産された、と説く。
- (11) 稲賀敬二「後期物語は『源氏物語』の垂流か——『寝覚の広沢の准后』と『源氏の准太上天皇』——」(學燈社『国文学』一九九七年二月。のち稲賀敬二コレクション4『後期物語への多彩な視点』笠間書院、二〇〇七年一〇月刊、所収)。引用は著作集、一四〇頁。
- (12) 『源氏物語』本文は明融本による。ただしその所在を『源氏物語大成』校異篇の頁数で示した。
- (13) 益田勝実「日知りの裔の物語——『源氏物語』発端の構造——」(『火山列島の思想』筑摩書房、一九六八年七月刊、所収)、一七四頁。
- (14) 片桐洋一「物語の伝承と変相」(『文学』四二巻七号、一九七四年七号)。
- (15) このあたりも古く、『寝覚物語』の形成——第一部の基盤——(『女の物語』のながれ 一九八九年一〇月刊、所収)で扱ったことがあるが、内容表現など見直すべき点が多々ある。ここで引用しなかつたゆえんである。

(よこい たかし・実践女子大学教授)